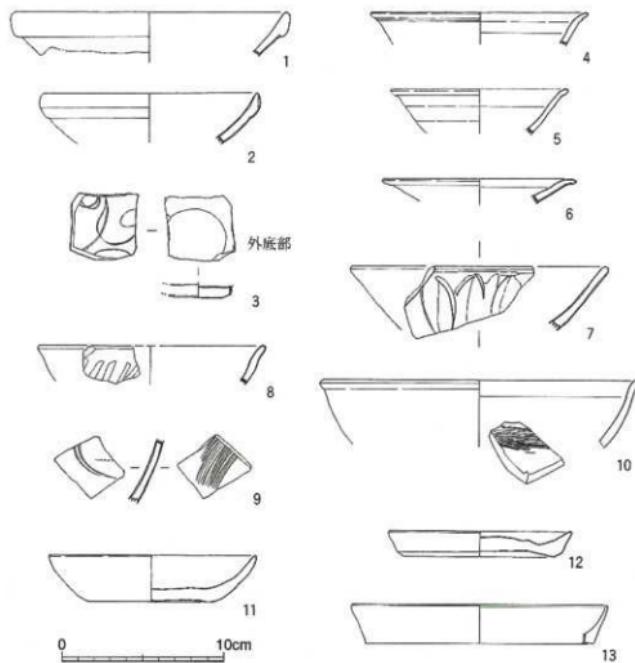


## 10. その他の遺物（第46図、図版19-2）

ここでは遺構から遊離した遺物、あるいは包含層から出土した遺物を取り上げる。

1は白磁玉縁碗で復元口径17.2cmを測る。釉薬は全体に薄く掛り、体部下半は露胎である。外面には発泡痕が看取られ、貫入は認められない。胎土・焼成は良好で、灰白色（Hue10Y7/1）を呈する。博多分類IV類、大宰府分類IV類である。B区K6、4層出土。2は白磁玉縁皿で、口縁部外面を薄く肥厚させ、端部は上方につまみ出して整形している。復元口径13.4cmを測る。ガラス質の透明感のある釉薬を掛けている。胎土・焼成とともに良好で、灰白色（Hue7.5Y5/2）を呈する。発泡痕や貫入は見られない。博多X類、大宰府II類。B区4層出土。3は白磁皿底部資料で、見込みに線描きの弧線文を施文している。外底面は露胎である。胎土・焼成良好で、内外面に細かな貫入が見られる。色調は灰白色（Hue5Y7/2）を呈している。博多V-c類、大宰府V類相当か。B区4層出土。4は白磁碗で薄く水挽きされ、外反する口縁部外面に僅かに段を有する。復元口径13.4cmを測る。内面には圓線を1条沈線で巡らす。釉薬は全体に薄く掛り、灰白色（Hue7.5Y7/1）を呈する。胎土・焼成とともに良好である。体部外面に発泡痕が認められる。博多V-a類、大宰府V類相当か。B区4層出土。5・6は白磁皿で復元口径11cm、12cmを測る。5・6ともには口縁部外面のケズリによって僅かに段を有し、また内面に1条の圓線を巡らしている。5の外面のケズリ痕は明確に看取でき、内外面に発泡痕が認められる。6は外面上に細かな貫入を認める。博多V-2-a類、大宰府IX類相当か。5はB区3～6層、6はB区4層出土である。7は龍泉窯系の鎬蓮弁文青磁碗で複弁と口縁部下の三角形文を片ヘラ削りによって陽刻している。復元口径16cmを測る。胎土は灰白精良で、焼成はやや上りすぎたようで、口縁部外面下に釉薬がやや垂れ気味となっている。また内外面に黄白の輪縮状の模様を釉薬下に生じている。外面に発泡痕を認める。色調はオリーブ灰色（Hue10Y6/2）を呈す。博多I-6-a類、大宰府-5-b類である。8は龍泉窯系青磁碗で小片のため口径が不明であるが他の資料を参考に14cmに復元実測した。内湾気味に立ち上がる体部に僅かに外反する口縁部が付き、端部はやや丸く収めている。外面は約3mm程のヘラにより斜位に削りを施している。胎土は灰白精良で、焼成は良好である。色調は灰オリーブ色（Hue7.5Y6/2）を呈す。B区4層出土である。博多I類小碗3-b類相当か。9は同安窯系青磁碗の体部資料である。内面は櫛描き弧線文と櫛刺突雷光文を、外面は多条の櫛描き文を斜位に施文する。胎土・焼成良好で、釉薬は透明感のある良質のものを使用し、色調は灰オリーブ色（Hue7.5Y5/3）を呈する。博多II-1-a類、大宰府I-1-b類である。B区K7、3層出土である。10は同安窯系の青磁碗で復元口径19.6cmと大きい。薄く均一に水挽きされた体部にやや外反する口縁部が付き、端部は丸く収めている。外面の文様は不明であるが、内面は口縁下に一条の圓線を巡らせ、その下に多条の細線櫛描き文を施文している。胎土は精良で、焼成は酸化焰により色調が明黄褐色（Hue2.5Y6/6）を呈している。博多II-1類である。B区4層出土である。11は土師器坏で復元口径12.8cm、器高2.9cm、底径8cmを測る。糸切りの底部から外上方に水挽きされ、端部は薄く収めている。胎土は水巻された粘土を用い、焼成はやや甘く器表は内外面ともに磨滅している。色調は黄橙色（Hue7.5YR8/8）を呈する。

試掘2次1159番地 No591。12は土師器皿でかなり上げ底に復元できる。糸切りと思われる底部から立ち上がる体部端は磨滅しているもののさほど伸張しない。内底面から体部に移行する部分が凹む特徴を見せている。復元底径9.3cm、器高1.6cm、復元口径11cmを測る。胎土は水練されて精良であり、焼成はやや甘い。色調は浅黄橙（Hue7.5YR8/4）を呈する。試掘2次1159番地2トレンチ出土。13は土師質皿で、他の資料と異なり硬質に焼成されている。糸切り離しの底部から薄く内溝しながら体部を作っている。内外面ともに水挽きの痕跡を残している。胎土は水練した粘土を用い、焼成は良好である。色調は浅黄橙（Hue7.5YR8/6）を呈する。試掘2次1159番地2トレンチ出土。



第46図 その他の遺物実測図 (S-1/3)

## V. 総括

3次に及ぶ試掘調査と本調査において遺構が確認されたのは、僅かに1127地点から1159地点にかけてであった。他のトレンチからは近世～現代の著しい搅乱が確認され、当該地周辺の土地利用の高さが改めて認識されたのである。また搅乱層からの古代の遺物は確認されず、当初目的としていた駅館などの遺構は検出されず、より周辺域に立地するものであろうと想定された。

検出遺構は第11表に掲載しているが、中世期に属するものがほとんどであった。わずかにA地点において古墳時代の住居跡（SB4）が遺存していたが、これも中世期の搅乱によって壊されていた。

本遺跡周辺では古く明治期に諫早農業高校造成時に多くの豪棺と銅剣（注1）の出土があったと伝えるが、今次の調査においては該当する時期の遺構や遺物の検出はなかった。

しかし古墳時代に埋められた環濠が検出され、調査範囲外に延伸するものであることが確認されたことは大きな成果であった。

古代においては船越駅が立地する場所として本遺跡周辺を想定していたが、今次の調査において関連する遺構や遺物の確認はなされなかつた。

中世期には船越城が立地した地点として諸史に記載されるが、本遺跡が船越城に先行する遺跡の一部であったであろうことは出土遺物などから想定してその蓋然性は高い。建物を構成する柱穴はA・B区において顕著に認められたが上屋を構成する柱穴は意外と少なく、柱穴の機能の不分明さは残ったのである。柱穴の覆土には似通ったものが多く確認されることは埋没時期の同時性を示すと思われるものの、後世の搅乱によって情報量が極めて少なく十分に検証できなかつた。また柱穴の覆土と同様の土層が層位として確認されず、搅乱がかなりの深さにまで及んだ結果であることを示唆していた。

また、C-1区において遺構の確認がなされなかつたが、これは尾和谷城跡（注2）のように「場」の機能の違いを示しているものと想定される。

種別	各区の遺構数								計
	A区	B区	C-1区	C-2区	D区	E区	F区	G区	
柱穴 (Pit)	227	239	0	80	63	14	51	38	712
土壤 (SK)	2	0	1	6	9	2	6	0	26
建物跡 (SB)	4	1	0	1	3	0	0	(1)	9
溝 (SD)	1	3	0	0	1	0	0	0	5
不明遺構 (SX)	1	2	0	1	0	1	0	2	7

第11表 検出遺構一覧

次に建物についてであるが、第11表に掲げる如く大規模な建物を構成するものではない。すべて掘立柱建物で、桁行き・梁間とともに2mを基準としていることは尾和谷城跡や有喜・上原遺跡（注3）例に同じである。ただ梁間が2mを超す例や、桁行きが不揃いな例があることは建物の

機能差を示しているものと思われる。また建物の所属時期は柱穴出土の遺物を見る限りにおいては時期差を見せてはいない。しかし主軸とした棟方向は各区検出の建物が一致する傾向は見せていない。

区	No	桁行き	柱間寸法 (m)	梁間	柱間寸法 (m)	主軸	備考
A	SB 1	3	2	2	2	N63° W	
	SB 2	3	1.2-2.2-1.6	1	2.6	N82° E	
	SB 3	1	2	1	2	N63° W	
	SB 4						豎穴
B	SB 1	4.5	2	2.5	2	N 2° E	
D	SB 1	2	2	2	2	N37° E	
	SB 2	3	1.2-1.75-1	1	2.8	N54° E	
	SB 3	1	2.3	1		N54° W	社?
C-2	SB 1	3	2-2.2-1.8	2	3	N48° E	

第12表 建物属性表

土師器を埋納した土壤は3基が検出された。C-2区SB 1を例むような位置関係にある。いずれも多量の土師器を含むもので機種的には壺が皿を凌駕している。F-2拡張区D検出のSK 2に龍泉窯系鑄造弁文青磁碗片を共伴する以外は、土師器のみで構成されている。中には灯火用に使用され器面が黒変した壺が存在しており、単に食膳のみに供されたものではない。いずれの土壤も略円形で浅く、中にはF-2拡張区AのSK 1・SX 1のように上屋を想定させる柱穴を有するものもあった。この土師器の埋納土壤の機能に関しては判然としないが、土器の機能停止による廃棄行為に伴うものとは理解されず、土壤掘削・土器埋納行為であることは、検出状況などから明らかである。馬渢和雄（注4）は「共同体員の関係確認・紐帶強化」、また原田信男（注5）は「14~15世紀頃には、同一身分の在地領主たちが一揆を組織して、地域的な結合を遂げる」ということが、盛んに行われていた。その誓約内容を記した一揆契約状という種類の文書には、「一株同心を意味する文言が数多く見受けられる。」としている。これらのことから土師器埋納土壤は、これら共食・饗宴行為に伴う痕跡と想定しておきたい。

次に土師器についてであるが、輪縁による水挽き整形がされており、また切り離しは回転糸切り離しによっている。整形手法はいくつかの類型に分類されることは記述したが、内底面に満巻き状の調整痕が残されていることを指摘しておきたい。また、胎土に水巻された粘土を採用していることから、同じ生産地から持ち込まれていることを示している。

第47図に類似遺跡の出土土師器の口径と器高の分布図を掲載している。伊古遺跡（注6）は長崎県雲仙市瑞穂町に所在し、『八幡宇佐宮御神領大鏡』（注7）に記載する「高来郡油山十二箇所」が置かれた地と想定される。遺構は旧河川脇で検出された。SX01は300点ほどの土師器で構成され、またSX03は150点ほどの土師器で構成されている。掘り込みは明確でなくSX01は1mの範囲内に収まっている。SX01出土土師器の口縁部には人為的な打ち欠きが認められ、祭祀遺構と想定している。伊倉城跡（注8）は熊本県玉名市伊倉に所在し、菊池川東方の丘陵端に立地して

いる。宇佐宮領として嘉応元（1169）年宇佐大宮司公通が買得し、永仁の頃下地中分され領主宇佐氏と地頭伊倉氏が治めた地である。土壙 SK 1 は N-2 レンチで検出され「土師器の皿、坏が溜まって出土した。中に土師器坏底部中央を人工的に穿孔したものや土師器のミニチュア鉢等が出土し祭祀的性格の遺構」と想定されている。時期は13世紀代の所産としている。府内遺跡（注9）は大分県大分市六坊北町に所在し戦国大名大友氏が治めた地である。SX66は明確な遺構に伴うものではない。土師器坏、小皿などで構成され13世紀的とされている。博多遺跡群 SK 80（注10）は2土壙が重複している。中国産青磁、白磁などとともに58個体の土師器が検出されている。坏には底部中央部に穿孔したものや、油煙が付着した灯明皿も認められた。数回にわたって土壙の周囲からまとめて投げ入れられたとし、祭祀に関わる土師器の投棄行為と見ている。時期は14世紀前半から中頃としている。東高木遺跡（注11）は佐賀市高木瀬に所在する。標高は4.5m前後の低平地であり、中世期高木氏が高木城を築いて支配した地域である。SD8044からは白磁V類（？）や龍泉窯系青磁I-1類、同安窯系青磁I-1 b類とともに土師器が検出されている。尾和谷城跡は市内上・下大渡野町に所在する。西郷氏の武将大渡野（馬場）氏が占拠したと言われる城で15~16世紀の所産である。土師器は柱穴、土壙出土のものを採用した。坏は外上方に大きく開く傾向を示し、後出する要素を見せており。勝尾城筑紫氏遺跡（注12）は筑紫氏が占拠した城跡で、天正15（1587）年の秀吉の国割りによって機能を停止した城である。A-5 レンチは館に伴う遺構群を検出したレンチで、輸入陶磁器類とともに土師器が検出されている。坏は尾和谷城例と同じく底部から外上方へ直線的に開くものが多い。沖城跡（注13）は市内仲井町の低湿地の田圃に所在する。諫早家初代龍造寺家晴が隠居した城と伝えている。土師器は土壙から出土し、口径から3分類できた。全体的に法量が小さくなる傾向が伺え、また中皿が出現する時期でもある。沖城跡では在地の土師器とは異なる薄手で内面体部下半に沈線を巡らす精製された坏が見られた。同様の坏は島原市森岳城跡（注14）や藤木四本杉遺跡（注15）などで確認され、この時期のメルクマールとなろう。

次にR及びRコマンダー（注16）によって上記遺跡出土の坏と小皿の分析を行った。データは遺構単位で採用し、複数の坏、小皿の口径、器高、底径の平均値を使用し、第58図にデンドログラムを掲載している（樹形図とデータの番号は一致している）。本遺跡F 2 拡張区A・SK 1(1)の小皿は東高木遺跡 SD8044 (24) と強い相関を示し、また本遺跡C 2・SK 1(3)、F 2・SK 2(5)が相關している。坏では博多80次 SK80 (21) と伊古遺跡 SX01 (8) に本遺跡C 2 区 SK 1(4)が、また伊古遺跡 SK03 (10) に本遺跡 F 2 拡張区 SK 1(2) が相關している。前述した16~17世紀代に比定される尾和谷城、沖城、勝尾城などの坏や小皿は今回のデータでは皿の範囲に包含され、坏を含めて全体的に小型化していることを示している。

以上類似遺跡の土師器について概観したが、時期が降るに従って坏、小皿ともに法量的に小さくなる傾向が伺え、また時期的に並行関係にある遺跡群の容器の容量は一定程度均一化していたことを想定させる。これは度量衡に対する各地の為政者の関心が高かったことを示すものと想定され、また経済的なあるいは商業的な取引などが背後にあってのことと思われる。しかし、度量

衡に対する全幅の信頼は未だ薄かったと見え、先に挙げた『安富寂歎泰長本物返田地等壳券』（注17）の中では「但江浦升定、互加判形」とことさらに注文していることから窺うことができる。

輸入陶磁器（破片数）はA区やB区からの出土がほとんどである（図版20）。白磁碗（II、IV、V、VI、IX類）39点、皿（IV、V、VII、IX類）19点、その他形式不明のもの135点、龍泉窯系青磁碗（I、I-2・3・5a、b類）53点、杯（III類）1点、皿（I類）3点、同安窯系青磁碗（I、III、IV類）6点、皿（I類）1点、その他形式不明青磁81点を数える。下記設定時期のV・VI期に属するものであるが、後世の攪乱により多くが造構から遊離した出土状態である。

滑石製品（図版20）はA区、B区、C2区からの出土がほとんどで、64点（破片数）を数える。造構からの出土はA区でC9P3、B区でP35、P67、P104、P106、P173以外は全て包含層からの遊離した出土である。製品は石鍋片が多く、縦型の耳が付く例や横型の鉢で一巡するものもある。中には黒く煤で変色しているものも見受けられ、厨房などが立地した区域と想定され、「ケ」の領域であったことを髣髴させる。他に容器状のもの（B区SB1）や片方から先細りに穿孔したもの、二次加工したものなどがある。

また鉄滓（図版20）も69点出土した。A区ではC8P14（SB2）、C8P27（SB1）、B9P3、C8P11、C8P16、C9P1、C9P13、D8P1、B区ではP136、P222、P229の柱穴、SX1や炉穴から出土しているほかは包含層出土である。しかし、鍛冶に関する資料は検出されていない。

今回検出された造物は食膳に関するものが主体であり、調理具や貯蔵具、加工調整具が見られなかったことから、かなりの程度の攪乱を受けていたことを示している。

さて本遺跡の造構群の年代観は次のように整理される。

I期 造構は検出されなかつたが弥生時代中期初頭の亀の甲式土器が遺物として確認されており、この時期前後から遺跡の利用が始まったといえる。

II期 弥生時代後期の遺物が検出されることから、この時期にも引き続き遺跡として機能している。環濠（B区SD2）はこのII期に壠削られた可能性も否定できない。

III期 古墳時代初期に埋没した環濠（B区SD2）から布留式期の土師器が見られることから古墳時代にも引き続き遺跡として利用されている。

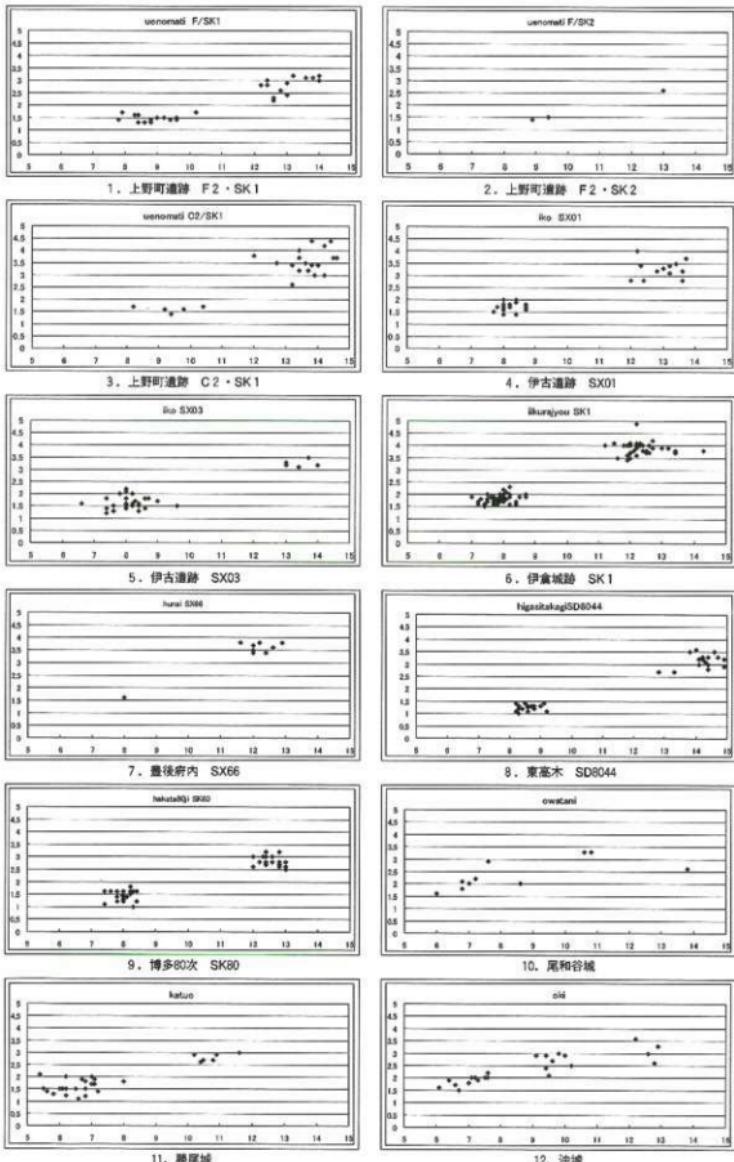
IV期 古墳時代後期の6世紀後半に住居跡（SB4）が営まれている。

その後、律令期の遺物が確認されず、生活域とは分離されて生産域、あるいは馬場などとして利用された可能性がある。

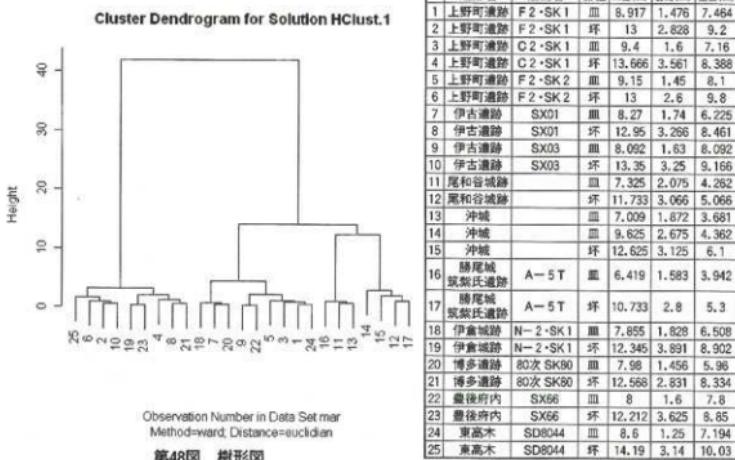
V期 12世紀代にはA区のSB2のみが確認される。このSB2は他の建物とは主軸を異にしており特徴的である。

VI期 13世紀前半の本遺跡の主体をなす時期である。建物の多くはこの時期の所産である。また土師器の廃棄土壟もこの時期に包含される。B区の清SD1もこの時期に属する。龍泉窯系青磁I-5b類や同安窯系青磁I-1-b類などが出土している。有喜・上原遺跡V期に相当しよう。

VII期 諸史に記載される船越城の存続時期である14世紀代を想定しているが、今次の調査においては確認されなかった。



第47図 各遺跡の环・皿法量図（X一口径、Y一器高）



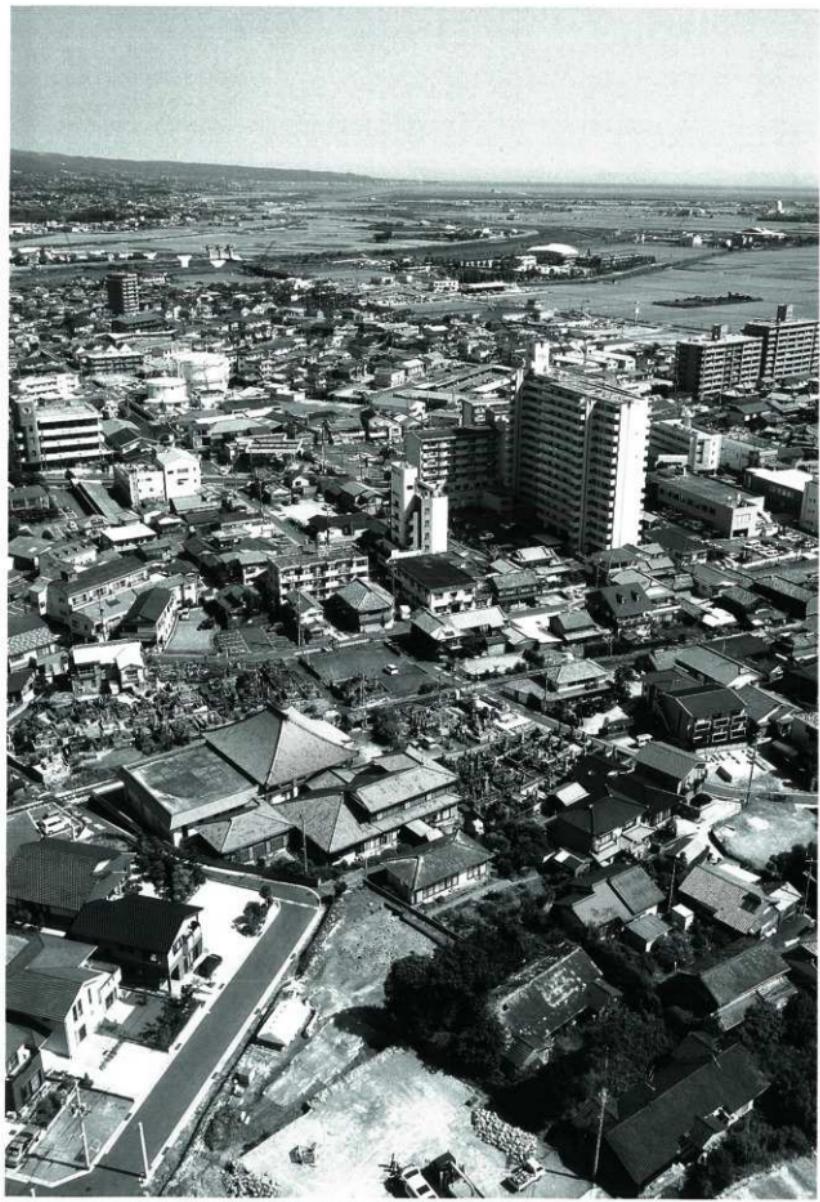
第13表 各遺跡出土の土師器属性表

- 注1 正林 譲「諫早市出土の銅劍」『九州考古学』第41~44号 1971
- 注2 諫早市教育委員会「尾和谷城跡」「諫早市文化財調査報告書」第16集 2004
- 注3 馬渕和雄「食器から見た中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997
- 注4 原田信男「古代・中世における共食と身分」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997
- 注5 諫早市教育委員会「有喜・上原遺跡」『諫早市文化財調査報告書』第20集 2007
- 注6 霧仙市教育委員会「伊古遺跡」『霧仙市文化財調査報告書(概報)』第5集 2008
- 注7 宇佐神宮「宇佐神宮史」史料篇第二卷 1985
- 注8 玉名市立歴史博物館こころピア「伊倉城跡」「玉名市立歴史博物館こころピア資料集第5集」2003
- 注9 大分県教育厅埋蔵文化財センター「豊後府内9」「大分県教育厅埋蔵文化財センター調査報告書」第24集 2008
- 注10 福岡市教育委員会「博多51」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第448集 1996
- 注11 佐賀市教育委員会「東高木遺跡Ⅲ」「佐賀市埋蔵文化財調査報告書」第21集 2008
- 注12 鳥栖市教育委員会「勝尾城筑紫氏遺跡」「鳥栖市文化財調査報告書」第78集 2006
- 注13 諫早市教育委員会「沖城跡」「諫早市文化財調査報告書」第14集 2000
- 注14 長崎県教育委員会「森岳城跡」「長崎県文化財調査報告書」第166集 2002
- 注15 佐賀市教育委員会「藤木四本杉遺跡」「佐賀市埋蔵文化財調査報告書」第24集 2008
- 注16 金 明哲「Rによるデータサイエンス」森北出版株式会社 2007
- 舟尾暢男「[R] Commander ハンドブック」オーム社 2008
- 注17 濑野精一郎編「肥前国御杵莊伊佐早莊史料」「九州莊園史料叢書」7 1963

# 図 版

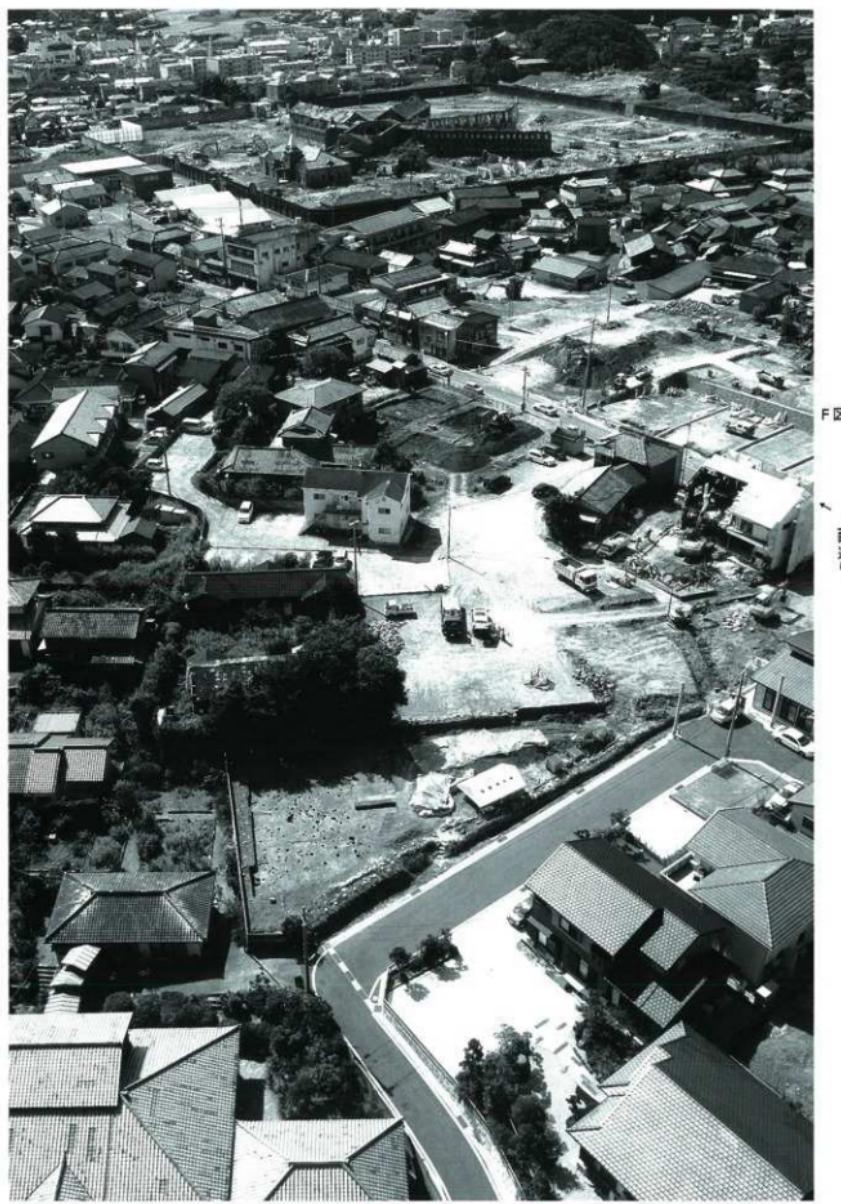


← 沖城路

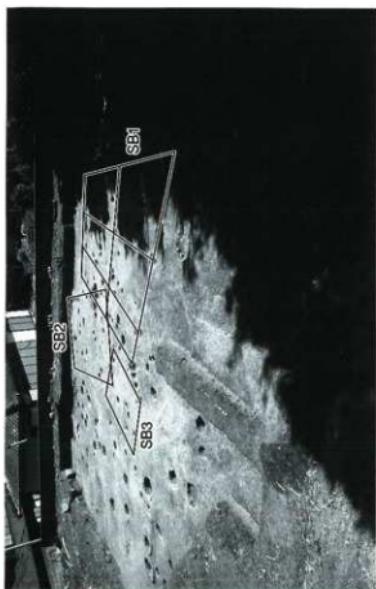


調査区 A 区、諫早湾を望む（南西から）

図版2



調査区A区～F区、上は旧長崎刑務所（東北から）



2. A区遭禍検出状況（西から）



4. B区遭禍検出状況（奥は SD 3、西から）



1. A区遭禍検出状況（西から）



3. A区土層地質状況



2. B区 SD1完掘状況（北から、右が天）



4. B区 SD2土層堆積状況（B-B'、東南から、右が天）



1. B区 SB1・SD1検出状況（奥はV層面調査中、南から）



3. B区 SD2完掘状況（北西から、右が天）



2. B区 SX2 検出状況 (南から)



4. B区 炉穴半剖状況 (南から)



1. B区 SD3 土層堆積状況



3. B区 SX2 半剖状況 (南から)

図版 6



1. B区 SX1 半剖状況 (南から)



2. D～C1区 SB1～3・SD1 完掘状況



3. D～C1区 完掘状況 (南から)

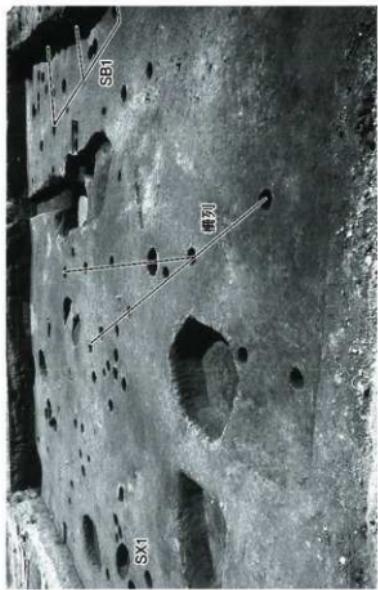
4. D区 剥壁土層堆積状況 (北から、右が天)



2. C 2 区 SX1 半割状況



4. C 2 区 SK1 土師器埋納土塚半割状況（北から）



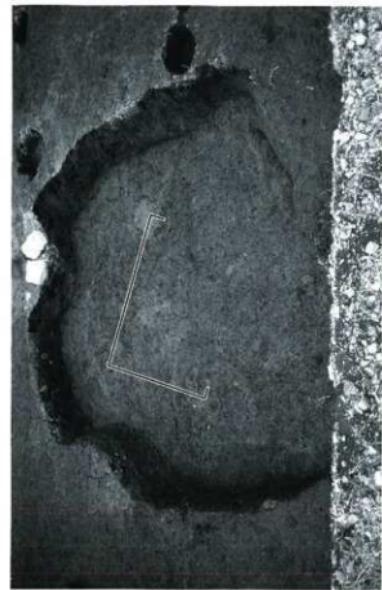
1. C 2 区 SB1・SX1・横列発掘状況（北西から）



3. C 2 区南壁土塚堆積状況（北から）

図版 8





2. F 2 拡張区 A SK 1 完掘状況（底面にピット検出）



4. F 2 拡張区 D SK 2 土器埋納土質検出状況（北から）

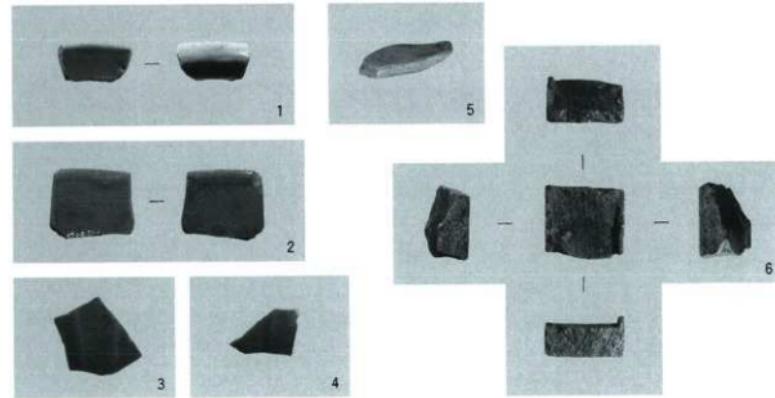


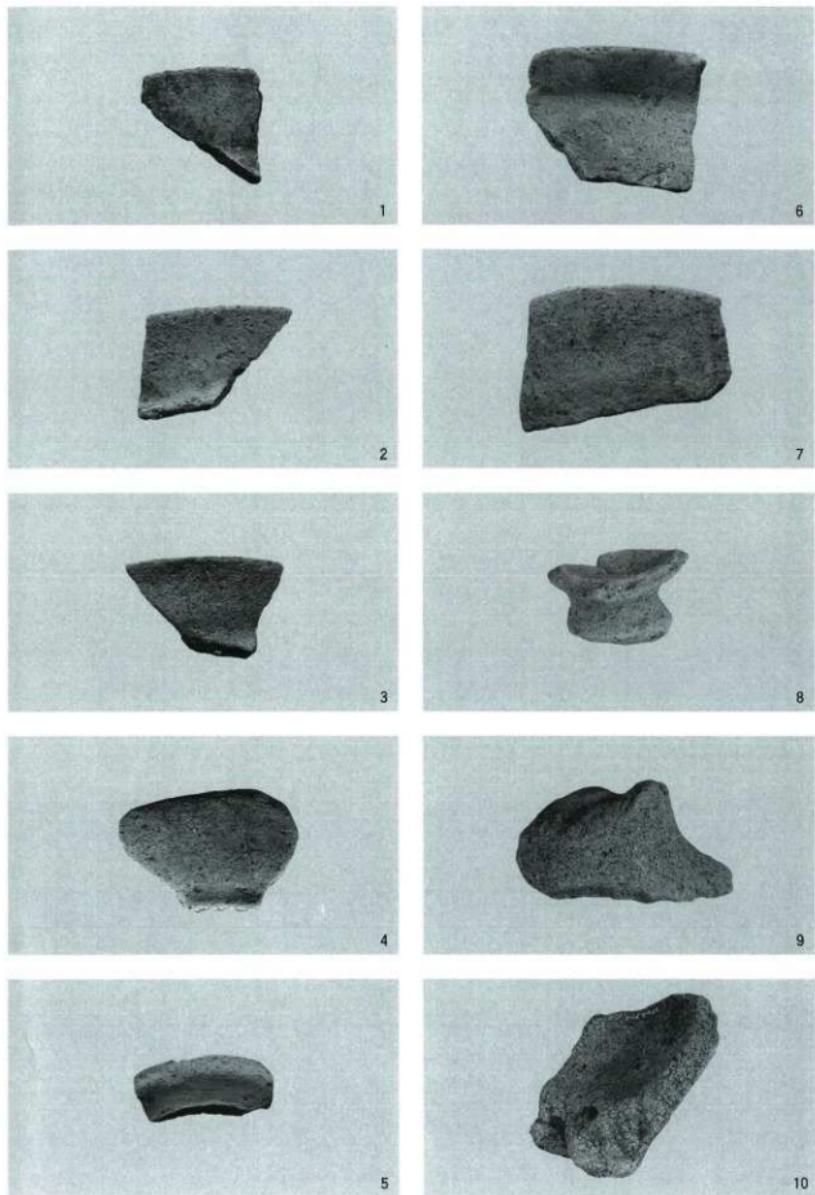
1. F 2 拡張区 A SK 1 土器埋納状況



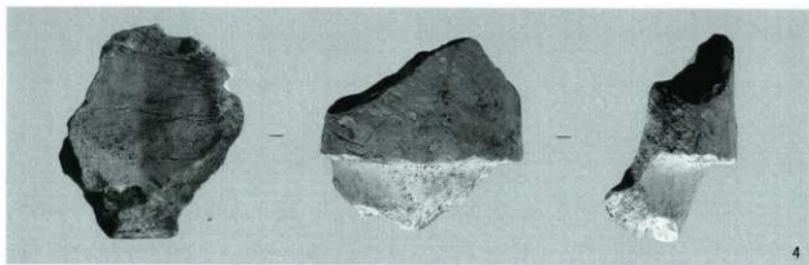
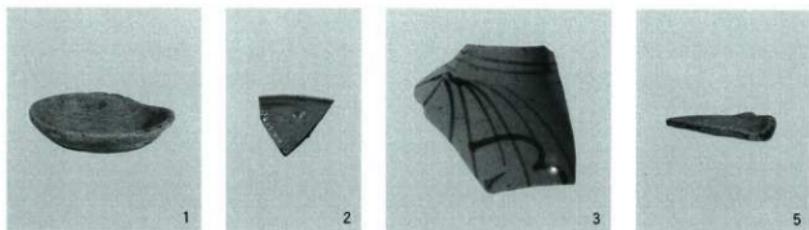
3. F 2 拡張区 A SK 1 底面ピット I 半剖状況

图版10





B区 SD 2 出土遺物 (1~10)



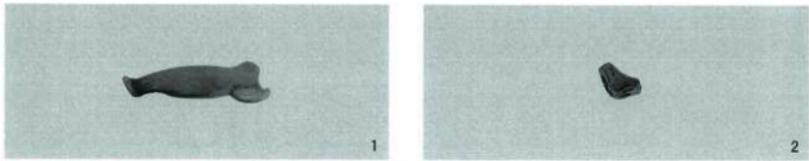
1. B区 SD 3・構列出土遺物（1～5）



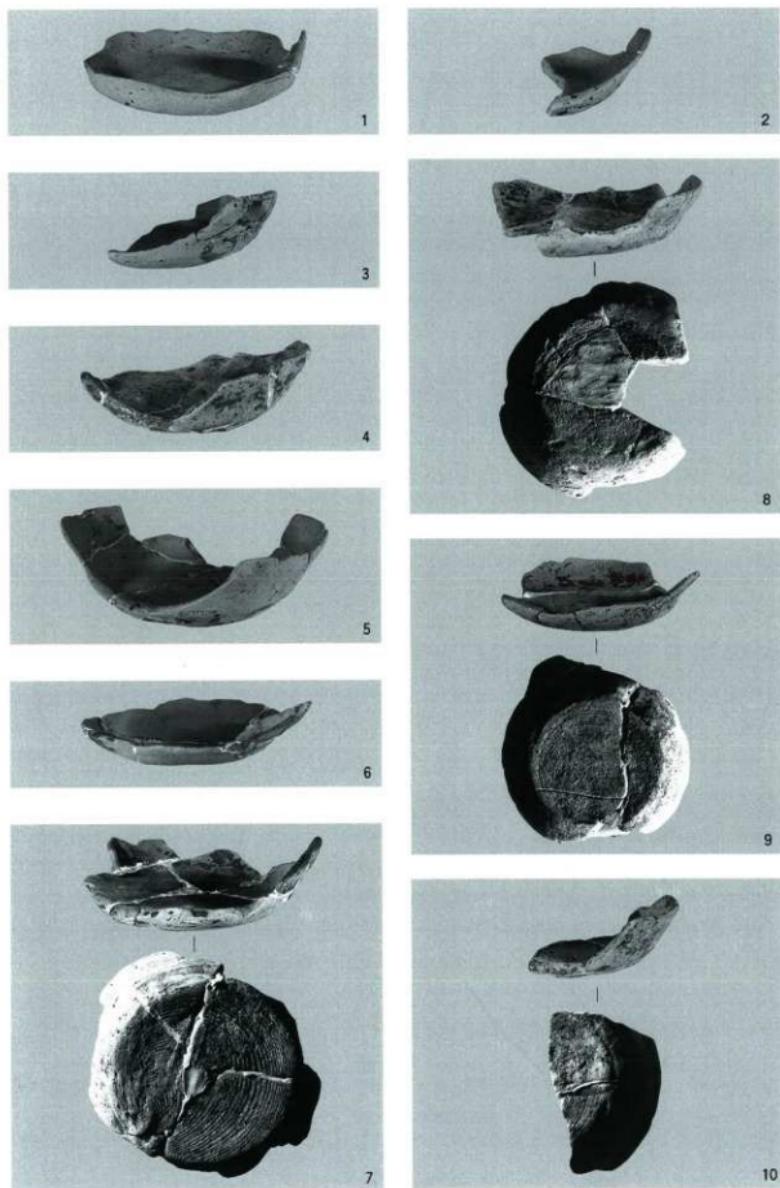
2. B区 SX 1出土遺物



3. D区 SB 1出土遺物（1～3）



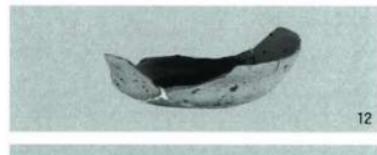
4. C 2区 SB 1出土遺物（1～2）



C 2区 SK1出土遺物 (1~10)



11



12



13



14



15



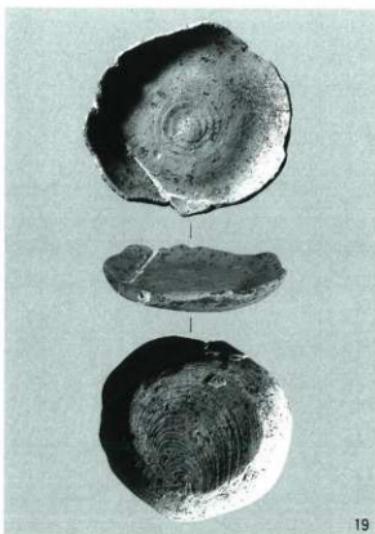
16



17



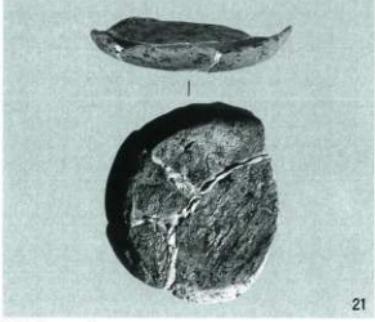
18



19

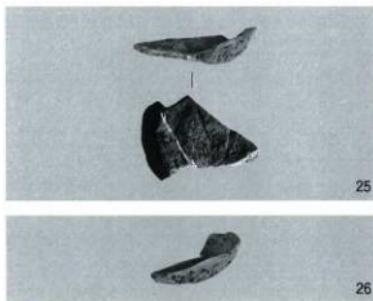


20

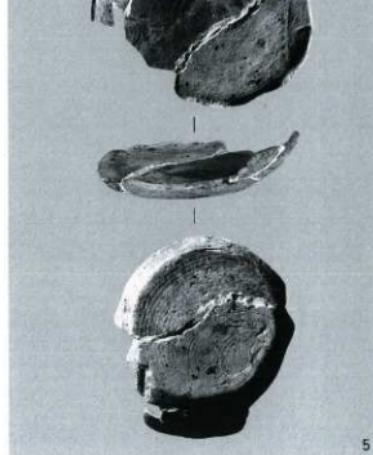
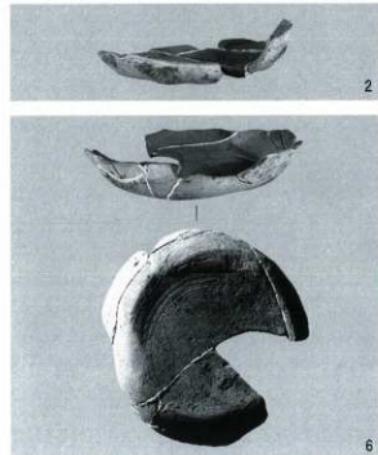
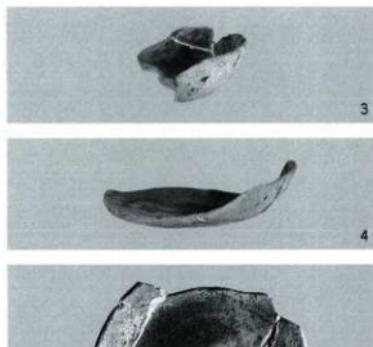
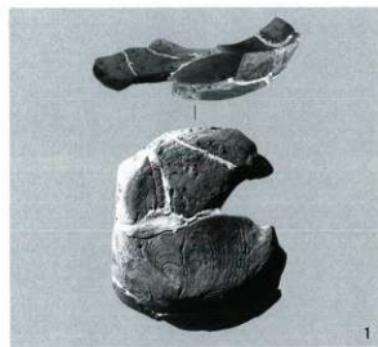


21

C 2 区 SK1 出土遺物 (11~21)

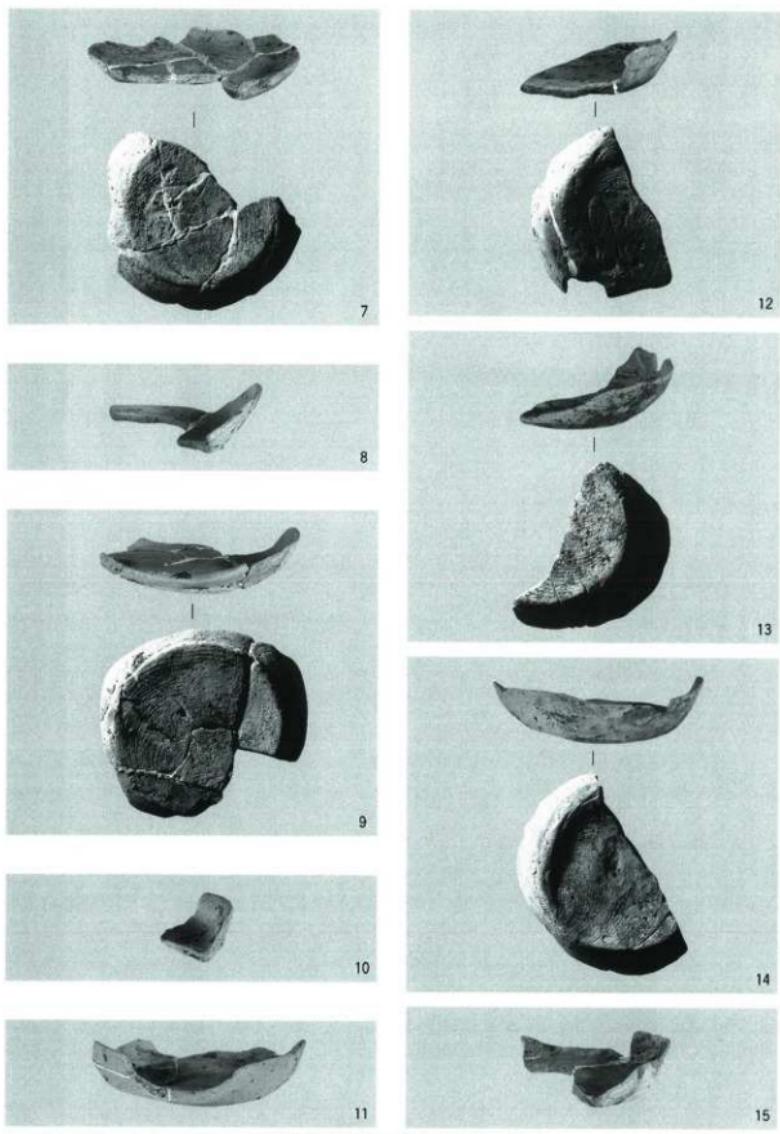


1. C 2 区 SK1 出土遺物 (22~26)

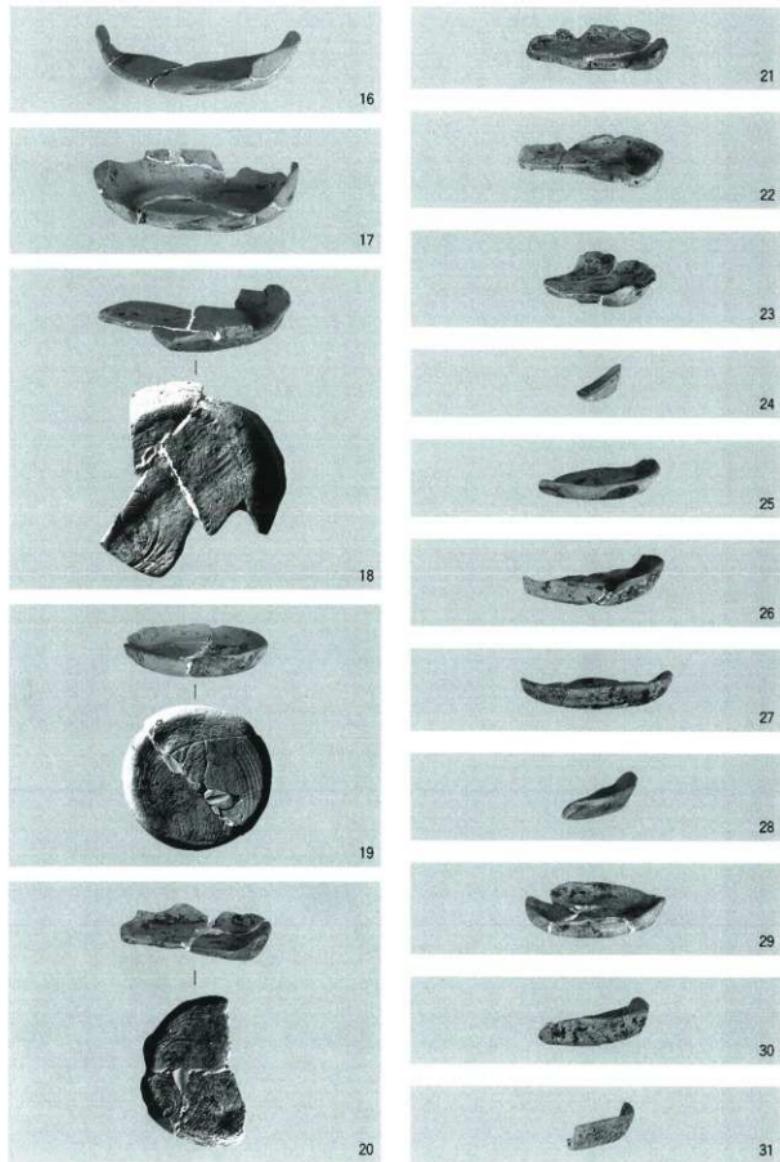


2. F 2 拡張 A 区 SK1 出土遺物 (1~6)

図版16

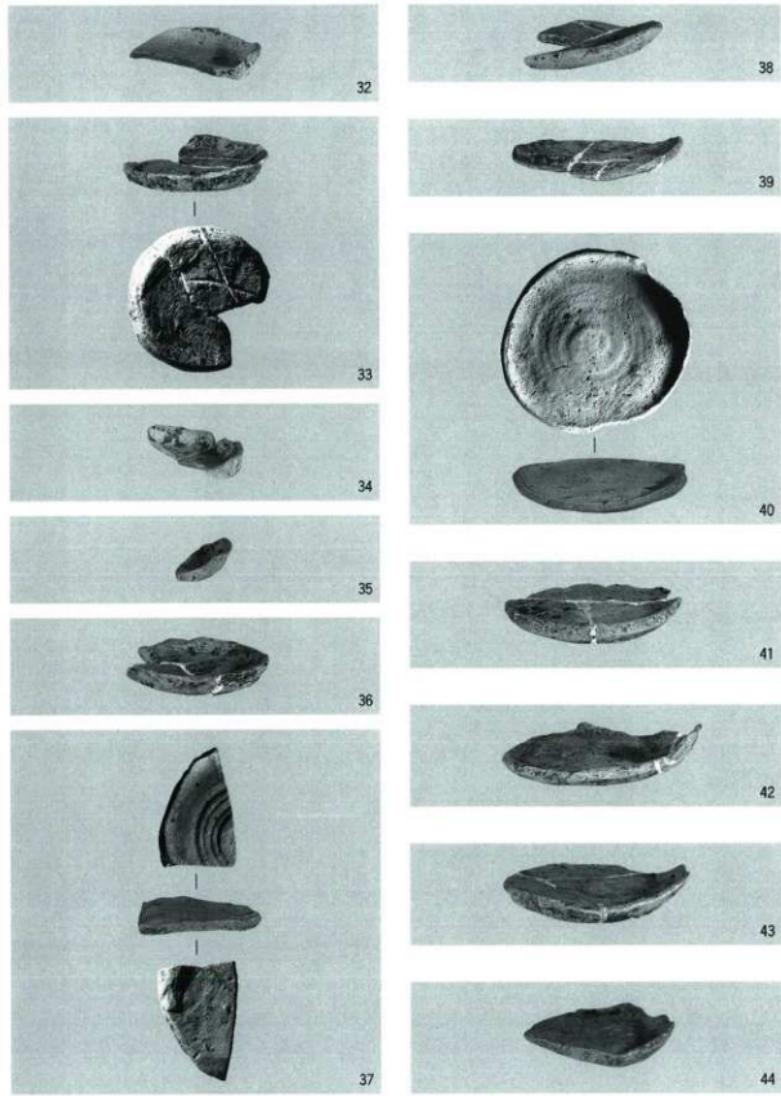


F 2 拡張A区 SK1 出土遺物 (7~15)

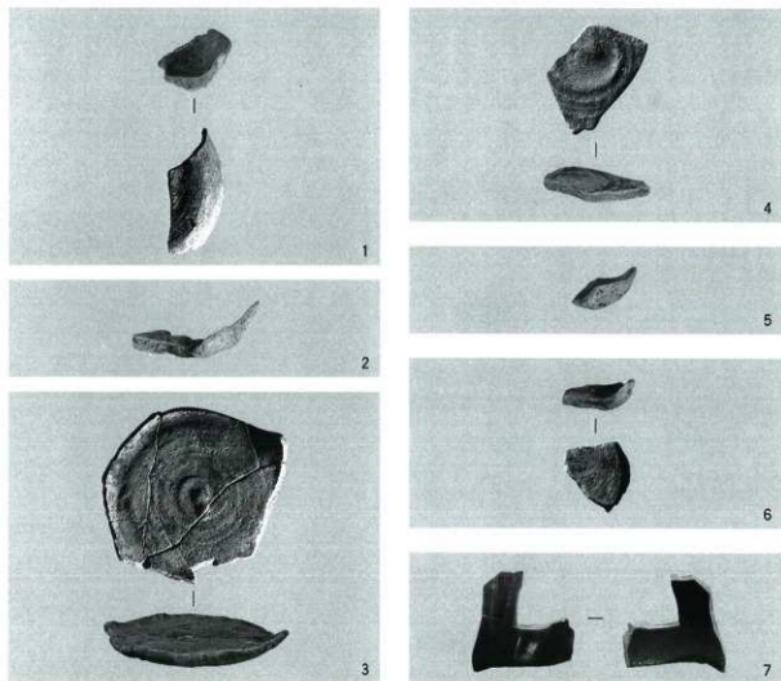


F 2 拾张A区 SK 1 出土遗物 (16~31)

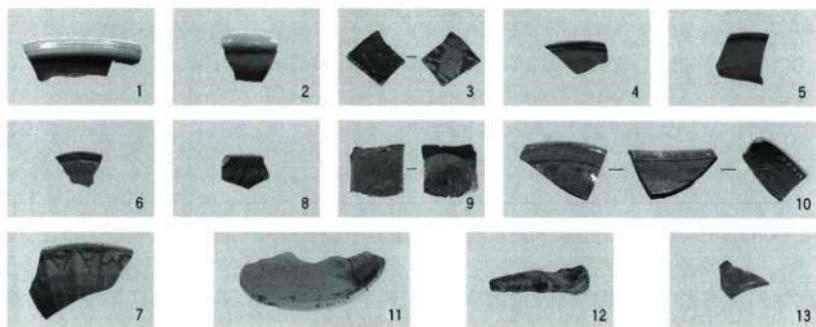
图版18



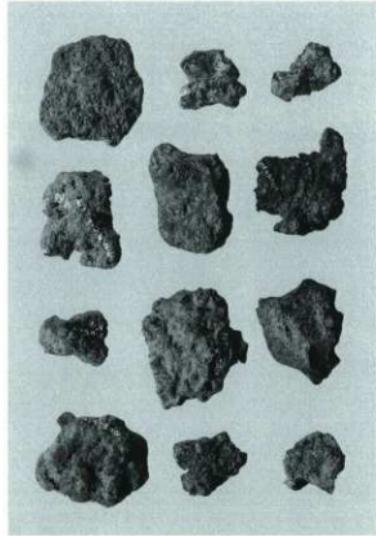
F 2 沈阳 A 区 SK 1 出土遗物 (32~44)



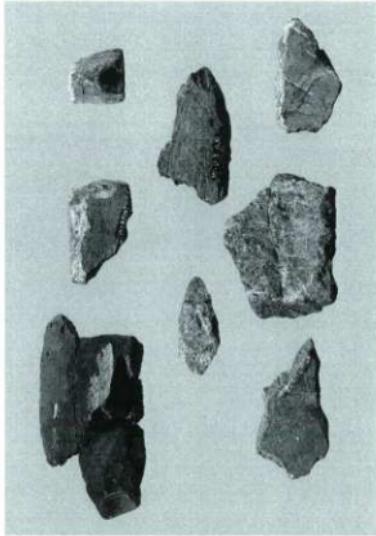
1. F 2 拡張D区 SK 2 出土遺物 (1~7)



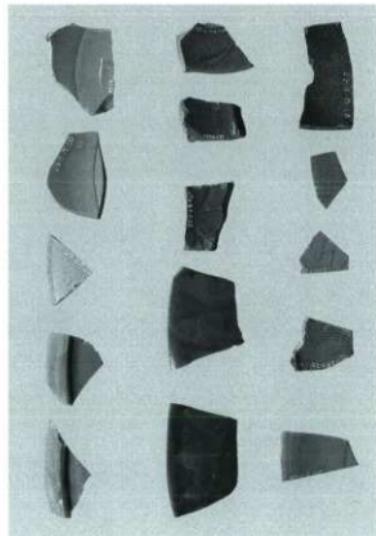
2. その他の出土遺物 (1~13)



2. 鉄滓



4. 滑石製品 (鐵)



1. 青磁・白磁



3. 滑石製品 (鐵)

## 報告書抄録

ふりがな	うえのまちいせき						
書名	上野町遺跡1127、1159地点						
副書名	諫早南部第1地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次							
シリーズ名	諫早市文化財調査報告						
シリーズ番号	第23集						
編著者名	秀島貞康、橋本幸男、古賀力						
編集機関	諫早市教育委員会						
所在地	〒854-8601 長崎県諫早市東小路町7番1号 Tel.0957-22-1500						
発行年月日	西暦2009年2月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上野町遺跡 1127、1159地 点	諫早市上野町 1127番地ほか	42204	30度 50分 25秒	130度 3分 30秒	1次20050318～ 0330 2次20060207～ 0324 3次	1次142.5m <sup>2</sup> 2次368.7m <sup>2</sup> 3次446.9m <sup>2</sup> 本調査2000m <sup>2</sup>	土地区画整 理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上野町遺跡1127、 1159地点	生活関連 構、 居館	古墳時代 歴史時代	環濠、 古墳時代住居 跡、歴史時代 (12～13世紀) 掘立柱建物跡、 土師器廐窯土 壇、溝	弥生土器、 土師器、 滑石製品、 輸入陶磁器			

諫早市文化財調査報告書 第23集

## 上野町遺跡1127、1159地点

平成21年2月10日

発行所 謳早市教育委員会  
諫早市東小路町7番1号

印刷所 (株)昭和堂  
諫早市長野町1007-2